

私の描いた世界

こしあんあんこ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

描くことに執着する【私】の話。

※こちらpixivにも投稿しております

9 8 7 6 5 4 3 2 1 0

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

64 52 47 42 35 28 22 16 7 1

目次

普通の日常、見慣れた風景。なんてこともない集団行動の一角。その中で私だけが浮いていた。運動も勉強も全てが人よりも劣り、その後を追いかけることで精一杯。追い付くことすらも一苦労だ。その過程で覚えた劣等感と負い目は嫌でも持たなければならなかったし、他人の顔色を窺う姿勢は自然と身についた処世術だった。

——話すことも纏められず言葉も途切れがちでどもる人間を、周りは放つてはおけない

可哀想、優しげにそう言つて私に手を差し伸べる人もいれば、そうでもない人もいるらしい。馬鹿な奴だとそうせせら笑つた人は私を殴つたし、その反応を見ようとわざと困らせるようなこともされた。

——どちらももしない傍観者もいたが、そのどれもが私には煩わしい

優しさなんて頼んでもいないし、暴力も虐めはもつといらなかった。善意で腹が膨らむのか、悪意は楽しいのか？ そう皮肉を込めて聞きたい心情も吐き出せないままに、腹の中で溜まる黒い感情に蓋をする。どちらも持ちえない思考だからこそ理解に苦しむのだ。頼むから放つておいてくれと心底願つた。

——善意も悪意も人を下で見ると卑た自己満足にすぎない

自分に酔えるナルシズムの極み。優しいと言われただけ、力を誇示したいだけ。そのエゴに私を巻き込むのだから我慢ならない。衝突も価値観の擦り合わせも他所でやって欲しいし、その度に親たちが総動員される光景は辟易する程だ。

——見られるのはもつと嫌いだ

様子を窺う中立の視線、憐れみと興味を孕んだその性根は醜く汚らわしい。ゴシップやら世論なんてものはそういう連中の趣味嗜好の延長で、陰で好き勝手に着色して噂するのだから堪ったモノではない。切望する想いは一つだけだ。

——ただただ、一人になりたい

噂の中心にもなりたくもないし、此方を見ないで欲しかった。誰もが格好的にはなりたくはないように私もそうなりたくない。ただ平凡でありたいという思いはあったのに。周りがそうさせてくれないのならば期待なんてしなかった。

——私は私だけの殻に籠りたい

この世にあるものは自分のみ。現実よりも空想を、思考よりも想像を。外の世界よりも内の世界にのめり込んだ。物理的に孤独であっても私は決して孤独ではなかった。本が好きだ、アニメも漫画も好きだ。別の世界に連れて行ってくれる娯楽は私の何よりの慰めになった。

——そして一番好きなことは絵を描くことだ

私の世界を好きに表現できて、誰よりも自由になれた気がする。誰にも真似することが出来ない程に、私は人よりも描くことが秀でていているらしい。それは私の抱く劣等感を僅かながらに癒す。

——唯一の特技だと思えるそれは私の自慢だ

凄いと言われる喜び、人よりも出来たことの優越感。成程、その上に立つ快感というものはこの様なものなのか。疑似的に体感するには充分な程に満たされるがそれだけだ。こんなことのために私を巻き込んでいたのかと思えば、嫌悪すべき情緒だった。私は私の描きたいものを描きたいだけだ。

——キャンバスや画用紙を前に筆を持つことが増えた

そこにあるモノは真白い紙と筆があれば、私は自分ではない誰かになれる。家の恥だの、クラスに虐めはなかっただの、世間体ばかりを気にする大人。同じ目線で立てない同級生。そのどちらも私には必要ない。優しきで満たされる幸福も守られるような安心感は既にいらなかった。まるで憑りつかれるように描き続けた。

——美しい風景と空想の生き物は私だけの世界だ

表現技法を求めて描くための技法と知識を身に付ける。表現できないことの悔しさと無知故に話せないことの恥の上での経験だった。コンクールで賞を取っただの、話題

の天才絵描きなどと周囲は騒ぎ立てるが評価はどうでもいい。

——私は私だけの世界を描くだけである

高校に上がれば妬みとやつかみは自然と出来たが、古典的な虐めは私の冷め切った心に響くことはない。何者でもない誰かの悪意に揺らされる心を持ち合わせてはいないのだ。

——無視し続けた結果、後悔することになった

私の描いている途中の絵を誰かに塗り潰されてしまった。まるで墨汁を落としたように黒く台無しになった絵。私よりも大きなキャンバスなのだから勿論描き直そうにもコンクールに出すまでの時間は残っていない。

——それ以上にこの作品をもう一度描けるとは思えなかった

作品の世界観と描いた筆圧とその時に感じた感情、それはその瞬間でしか表現できないのだから無理だった。同じものを描けるかもしれないが、それはただの模倣でしかない。何においても描き直すという行為に行き着かぬ私の心に穴が開く。私の生み出せなかったこの子は泣いているようで、私は守れなかったことを恥じた。油絵の上にペンキで塗り潰された絵をなぞれば指先にペンキの塗料が移る。ベツタリと濡れた黒い指、鼻先に近付ければ絵具とはまた違う独特の匂いが鼻についた。

——クスクスと笑う声が何処かから聞こえる

これをしてかしたであろう人物たちが此方の様子を窺う。憶測でしか語れぬが僅かに吊り上がる口角を見る限り間違いはないらしい。クラスメイトと、それから部員の見知らぬ誰か。

——私はようやく彼らを認知した

確かあのクラスメイトたちは幼稚な落書きと嫌がらせをしていたか？確かあの部員は同じコンクールに参加していたような気がする。やはりどちらもボンヤリとした記憶でしかない。ブツリと私の中で何かが切れた気がした。腹の内に巡る不快な熱を感じて初めて怒っているのだと自覚する。

——額縁の向こうの世界の人間が私の世界に土足で踏み込んだ

理由なんてそれで十分だ。だが、私は暴力で訴える程に下品ではなかった。そうやって野蛮なことをすることすらも嫌いだ。覚えた感情は全て私の描くものに変えて昇華するのだ。ドス黒く腹の底から滲んだモノを吐き出すため、私は新しいキャンバスを前に立つ。黒い絵の具を乗せた筆が白を汚した。

——下書きすることもないままに筆を動かせば、世界が始まる

灼熱の業火のような激情と、私の中で冷徹に下す薄暗い思考。培った知識は思うがままに表現し、蓋をしていた内なるモノを思い起こす。くつくつと喉から漏れた音は次第に膨れ上がり抑えきれなくなった。興が乗った筆は更に赤やら白と色を増やした。

——色を全て使った頃には出来上がっていた

既に日数はある程度流れ、放課後の時間を惜しむことなく出来た作品は酷く凄惨なものとなった。造形は酷く人外じみていて、蟲にも獣にも思える化け物がその絵に収まっている。その化け物は人々を踏み碎き、彼らの臓物で積み上がる山の上で吠えるように立っていた。見るもおぞましく、身の毛もよだつ殺戮の光景。今にも出てきそうだと錯覚する程のリアリテイ、心惹かれてしまうモノがそこにある。

——その絵を眺めて私は感嘆の吐息を漏らした

誰かを思つて描かれる絵には命が宿ると聞くが、正しくそれを体現したようだ。正の感情よりも負の感情で振り切れているが、最高傑作だと言える程の出来だった。

——不思議なことに自然と怒りは消え失せていた

波立たぬ湖畔のような静けさを胸の内に取り戻す。水底に佇むような心地良さは私の好む静寂だった。描き終えた頃には日は落ちてしまい、手探りで帰ることになる羽目となった。だがそれでも初めて楽しいと思えた時間だった。多幸感で満たされた感覚、私はそれを一生忘れることはないだろうと確信した。

翌日のことだった。私の通う学園がやけに騒がしい。見慣れぬ警察官やら救急救命士が校内を歩き回り、生徒たちもまるで困惑した面持ちでそれを眺める。私も情報を得るために彼ら同様に集団に溶け込んで様子を窺った。知らねば対策も講じることも出来ないのだから情報とは知って然るべきものである。

——何より、あちらの方には美術室がある

警察が出なければならぬ程の騒動、気にならない筈がなかった。不安を抱える私は必死に騒ぐ彼らの言葉に耳を傾ける。ごちゃごちゃと言葉が飛び交う中、私が聞き取れる意味ある単語を聞き取り啞然とする。『美術室』、『生徒』。この二つの言葉ばかりが何度も飛び交っているのだ。美術室とは縁遠い案件であれと願ったが、残酷なことに美術室で何かが起きたようだった。

——私の絵は無事なのだろうか？

一抹の不安を抱える中、教員らが総動員で野次馬をする生徒を追い払う。教員らの眼に込められる感情は鬼気迫り、動揺からか声色は震えている。余程の事態が起きたこと

を察した。でも、と尚も食い下がり詳細を知りたがる生徒たちは問答無用に殴られた。口から血を流す男子生徒の首元を掴み教員は怒鳴る。

「いいから、さっさと教室に行け!!」

けたたましく轟音をも思わせる怒声。周囲の空間をビリビリと揺らし、鼓膜が破れそうな程の音量に耐えかねて耳を塞ぐ。周囲も流石に不味いと悟つたらしい。我先に蟻のように散り散りに逃げる中、私も後ろ髪を引かれる思いでその流れに従い教室に入った。

教室に入れば朝礼は始まっていないようだった。クラスメイトが騒めき、落ち着きなく互いの仲間内で集まる。それぞれの手に入れた情報を共有し合っているようだった。私は一人机に座り、素知らぬ顔で聞き耳を立てるが真新しい情報は見当たらなかった。

—— 結局のところ、見たモノだけしか知らないようだ

周囲も訳が分からないようで戸惑いを隠せない。始業のチャイムが鳴ったが担任は来ないまま、徒に時間が過ぎた。担任も居なければ教員も居ない、無法地帯と化したクラス内では各学年の生徒たちが行き来する。次第に時間が過ぎたことで戸惑いも薄れ

たクラス内には緩やかな空気が流れた。

——クラスメイトが増えていく中、一部の生徒だけが来なかった

それは私のクラスメイトの一部と、それから美術部員の一部。それを知ったのは周囲の生徒たちの他愛もない話から。空いた席を男子生徒が指差して騒ぎ、居なくなつた彼らに視点が向けられたことが始まりだった。

——他にも居なくなつた生徒も居るのではないのか？

そんな憶測が飛び交い、他にも居なくなつた生徒を探す。その生徒たちが誰なのか行き着いた。私にもそれが振られた。

——同じ美術部なら何か知っているのではないのか

そんな下手な勘繰りをされているようだが私が知る筈もない。私は絵を描いただけだとやんわりと返せば、そうかと返されてそのまま話は終わった。

——あいつらが何かしたんだ

素行の悪いクラスメイトだし、最近怪しかったからな。これまた勝手な憶測で好き勝手に面白おかしく話す生徒たちに私は眉を擡める。

——普段は大人しい生徒も此処では好き勝手に語つた

私も私もと更に増えていく光景はやはり好きではない。好き勝手に話してあることないこと吹聴して更に激化すれば、収束が付かない。それは日頃の行いの悪さ故か、居

ないことをいいことにとうとう悪口に発展すればその人間の底が見えるようだった。

——やはりこうなるか

呆れと嫌悪で不快感が増す。腹の奥で暗い熱が循環し、吐き出したくなつて私は口元を覆つた。

——それと同時にガラガラ、と引き戸が開く音がする

やつて来たのは担任だった。ようやく授業が始まるのかと思えば少し気が紛れるが教卓に立つ担任から動きはない。

「……皆さん、落ち着いてよく聞いて下さい」

悲しい報告をしなければなりません、長い沈黙の末に口を開いた担任の言葉は酷く重々しく響いた。

——神妙な面持ちで、一つ一つの言葉を担任が選んだ

クラスメイトが入院したことを話す。入院しなければならぬ程の大怪我、かつ意識不明の重体。姿を見せない生徒がそうなつているとは知らなかつたようで、クラス内はただただ騒然とした様子で話を聞いていた。ただ驚いた素振りを見せる者、顔色真っ青にする者と反応はそれぞれあるが私は一線引いた立場でその反応を見る。先程まで嬉々として噂やら悪口を言っていたあの態度は何処へやら、泣き出す人間も出てしまふ始末だ。

——同じ学び舎を共にする程度の仲であつても情がない訳がない

ましてや人の生死に関わる程のことになるのなら話は別だ。迫っている感情は後悔が大きいのだろうけども。担任も事情も知らずに嗚咽を漏らす。仲間が返つてきたら暖かく出迎えましょうと見当違いなことも言つていた。強く頷いた素振りを見せるクラスメイトのその逞しい精神に脱帽した。

——結局その日の授業は短縮されて皆思い思いに帰宅した

私はその帰りに美術室に立ち寄ることにした。事件現場にも近い場所でもありいい顔はされなかつたが、私はある程度の信頼があるようで特別に許可が下りた。絵を持ち帰るだけならと美術室内の鍵を貰う。

——絵を持つて帰るだけだからそれ以外に用事はなかつた

部活も全て休部となり残っている人間と言えば片手で足りる程だ。静まり返つた校内で私の足音だけが響く。途中でまだ事故後の名残りを見ることになった。廊下と美術室を隔たる窓は割れて、四散した硝子の破片が足元に散らばり血痕が残っている。まだ片付けは終わつていないようでその凄惨さに私はただただ口を開く。

——どうしたらこうなるのか？

そんな疑問を抱えながら私は美術室に入り倉庫の鍵を開いた。美術部員と教員以外に入らぬその倉庫内、その大半は美術の授業で必要な道具が揃うが美術部員の描いた作

品もそこに置くこととなつてゐる。

——勿論、私が昨日描いた絵も此処に置いてある

そのキャンバスを前に立ち私は絵を撫でる。絵具は乾いているようで持つて帰れるようだ。私はホツとした様子で作品を収めた。

——何故、この作品は無事なのだろうか？

そこではた、と気付く。そういえば、私の作品の大半はあの人たちに台無しにされていたような気がするのだが。不思議そうに首を傾げるがやはり心当たりはないのでそこで思考を打ち消した。ゆらり、と空間が歪む。それを見たような気がするが私は帰ることばかりを考えてそれに気付くことはなかった。その日は特に変わることもなく終わった。

——絵を描いて暫くしてからのことだった、私の眼は何かを捉え始めていた

ぼやけた影が揺らめいていただけで、最初は見間違いだと思つていたのだがやはり気のせいではないらしい。次第に鮮明になる彼らを見過ごすことなど出来なかった。

——私の視界に捉えたものは酷く歪で醜かった

蟲のようで獸のようだがそれらに該当しない肉体、何処か虚ろな眼は病めいている。先日私が描いた絵が飛び出したようにも思わせる生き物たちがそこにいた。

——所謂世間一般でいうところの化け物だ

当たり前のように街中に存在し、ぼそぼそと意味のない奇声を上げているのだ。すれ違う誰かの肩に乗るモノから日陰にひっそりと佇むモノまで。多種多様なそれらは大小関係なく私の視界に入るものだから自然と観察するようになった。

——独特な造形と特殊な動きをする個体

生き物はそれだけでも創作の閃きの助けになり得るのだ。彼らのモチーフで描く絵はとても描きやすく私の世界で息をし始めた。勿論彼らもある程度知性があるように目が合えば執着される。人にやたら纏わりつく個体はその傾向が強く、視線が被らないようにするために伊達眼鏡を掛けるようになった。

——気付けば私は彼らを見るのが好きになつていた

いつもの学校、興味の持てない親とつまらない同級生。変わらない風景に歪な生き物が加わる。彼らは私の灰色の心を色付かせた。驚愕が興味へ、好意へと昇華されていけば私は彼らへの更なる探求へと行動が移行した。

——だがそれを他人に話すことはなかった

私以外に見ることも出来ないらしいそれを口にする程馬鹿ではない。そもそも私が

友人なんて大層なものを作らない性格が功を奏した。ひっそりとその趣味は継続されていた。

——これが私の都合の良い幻覚ではないことは確かな事実だ

他にも見える人が居ると確信にも近い感覚を感じ取っていた。そうでなければ彼らが息をする筈がないのだ。世界の端の秘密を見ているようにも錯覚する。私は卒倒するように彼らを描くようになればいいよ人が寄り付かなくなった。気持ち悪いと最後に吐き捨てるように言われたがそれで良い。

——私の世界に籠ることは私の望むところだった

一人きりになった方が筆の動きが良いのだ。川の土手で私は一人浮かれた気分で筆に絵具を乗せているとねえ、と声を掛けられた。

「それは君の想像の生き物なのかな？」

問いかけられる言葉、その声色は何処か興奮を隠せない様子で楽しげに聞こえた。視界に映るキャンパスの端で私はある人物を捉えた。普段なら一瞥して無視するのが定石である私だが、その人物はやけに私の目を惹くのだ。

「どういう意味で聞いているのかな？」

珍しく私が答えた気がする。そんな気分になったのはその人が私と同じ場所を見たからだろうか。そうだね、私の問いに考え込む素振りで顎に手を添えて、しばらく時間

が流れた。

「君の描くモノがそこに居るから、と言えば君はどう応えるかな？」

その問いかけに私は目を瞬かせる。まさかまさか、私だけの秘密であったがそれを見ることが出来る人間を見るのは初めてだった。初めて私はその人物を見て認知する。額に痛々しい一筋の傷と縫合後の縫い目が鮮明に私の目に焼き付いた。

——私があの人のことを知っていることなど微々たるものだろう

あの人、と表現するのは私の中で完結出来る呼称が見つからなかったからだ。彼と言えいいのか、彼女と表現すべきなのだろうか？どちらもしつくりとはしなかった。

——性別は二つに一つしかないのだが、あの人にはそれがないように思えた

一人称は私、話し方も中性的でどちらとも取れるものを選んでいる。だからこそ性別などあの人にとって些細なことなのだろうとも理解した。……否、そもそもそういうことに拘りがないのだろう。好きに呼んでいいよ、その言葉通り名前を適当なモノを選んでも怒りはしなかった。

——私とあの人と過ごす時間は短かった

会話らしい会話もそれ程多くはない。私が描く川の土手での時間があの人との会う時間になっていた。会う日にちも不定期で私の気分が乗った時に描くものを眺めにたまに来る程度。知人以上友人未満といった関係だった。

——そんな関係であつたからか、不思議と関係が続けられた

私はその距離感が居心地よくあの人を好ましく思っていた。何せ偏屈と称される程

人に無関心な私だ。余計な口を挟まぬあの人もそれを察していた節もあったようだけれどもまた関係が続いた理由になつていた。何より、それ程長く続けていこうと思つていない意図も見えているから私もそれに倣うだけだった。

——互いに興味があるものがあつたのもまた事実だ

打算的なものがあることも知つていたからこそ二人の共有する時間を長く続けていた。あの人も私の絵を眺めることもあつたが決してそれだけをしている訳ではない。あの人も自身何かすることがあるようで古めかしい書物を読んで互いに思い思いの好きな時間を過ごしていた。

——その時に、私は初めて呪術師という存在を知る

呪力から始まり呪霊、術式それから呪術師。嘘みたいな隠された裏の世界の現実を包み隠さずに話してくれた。この時私は何も知らぬことを自覚するが何も恥じることはないのだとあの人は笑つた。

「一般の家でも呪術師が出ることは珍しくはないからね」

そう穏やかに言われてしまえば、私もそれ以上の言葉は見つからなかつた。やんわりとした物腰と嘘偽りのない物言い、私にも分かりやすく掻い摘んで端的に物を述べるあの人の話は耳に入りやすく記憶できた。独自の見解、学者とも思える博学さは一朝一夕

で身に着くことではない。私も絵を学ぶ上でそれこそ年数単位を刻んで知識を身に付けたのだが、あの人の呪術の知識はそれよりも遥かに年季が入っているように思えた。分類は違くとも、その知識量は敬服するに値した。

——私達はあの土手で互いに見解を述べて互いに知識を深めた

初めはあの呪霊は何を考えているのだろうか、ということから始まった会話。勿論私は素人にも同然であるからあの人に助けられた部分もあるが、話を飛躍させて更に深くのめり込んでいく。どんな人の思いでその呪力は呪霊に形を作るのか、力を与えるのか、どう行動するのか。

——総じて言えることは呪霊という化け物は人に害を与えるものだ

憎悪であっても、友愛であっても。人の思いは呪いだ。あの人を殺したいという憎悪が負の感情であるように、正である筈の感情の愛ですらも呪いになり得る。それはあの人と一緒に居たいという執着に成れの果てだ、愛もまた歪んだ呪いなのだ。

——そこに感情があるのなら呪力に変換されていく

非術師の持つ呪力は無意識に垂れ流されて呪いとなり、形となり呪霊となるのだ。呪霊という形となった呪いが人を襲うのもまた道理だった。

「仮に呪霊を無くすのなら君はどうする？」

あの人はそう提起する。まるで授業のようだと思いつつながら私は少しばかり呪霊につ

いて考える。人が生きる営みを行うように、彼らは彼らの在り方であろうしているだけだ。そこで呪術師が祓うという過程がありそこでも人が死ぬのだが、私達の世界はそうやって回っているのである。どうにも血生臭いのだがそれが現在の世界の現実だ。呪力の捻出をコントロール出来る呪術師ならばいざ知れず、非術師になつてくるとどうにもならない。水栓のない蛇口をどうしようという話になつてしまふ。

——だったら非術師を全て殺せば呪霊はなくなるのだろうか、それは理想的ではないそれこそ極論だ。世界規模の総勢80億の中から一人一人殺すのは結構な苦勞が見て取れる。ましてや人間を一人殺すのだから心の消耗は相当なモノだ。ただただ摩耗する未来しか見えてこない。

——仮に術師だけの世界になるとしよう

世界人口は現代のようになるのだろうか？術師同士で子供が生まれてもその子は果たして術師なのだろうか？疑問ばかりが浮かぶ。間引いてまた残り少ない術師だけを残すのだろうか、それを繰り返せば見える未来は人類の衰退と穏やかな滅亡しかなかった。

——食物連鎖が崩れぬように努めて、維持することしか出来ない

それが現状ではないのかと言えばあの人は手を叩く。パチパチと、素晴らしいとまるで子供を褒めるようにあの人は拍手喝采してみせた。

「確かに、今の人類ならばそうするしかないだろうね」

何にせよ、人類は一つ上の段階に進める必要がある。くつくつ、あの人は喉を鳴らし笑う。まるで笑いのツボに嵌ったように腹を抱えて笑う素振りを見せる。あの人の感性は掴み切れない私だがあの人はある程度笑い落ち着けば話を続けた。

「何故君は非術師を全て殺すことを考えたのかな？」

「そっちの方が簡単だから」

呪霊の発生は止められるものではない。どうやったって呪力が出るのならばコントロールが必要になってくる。全人類呪力をなくすか、使いこなすか。結局この二つに手段が絞られるのだ。だが呪力をコントロールさせる方法は非術師には難しいことなのだと思う。私は物覚えが悪いように、教えても分からないことはどうしたってあるのだ。感覚で覚えるのならきつと得意不得意は出てしまうのは明らかだ。

——出来ないなら仕方ないね、無理はしないでいいよ

呪霊が出るのならばそう言つて優しくは出来ない、生死が関わっている。いつそ呪力が使いこなせる人間を残す方がいいのだ。呪術師を全て殺したらどうなるのか分からないのならばそっちの方が簡単だと答えればまたあの人は嘖き出して笑う。……どうやら笑いの沸点が低くなっているようだ。

「いや、すまないね」

君の言い方が余りにもね、しかめっ面を見せる私にあの人は謝罪してきた。僅かに気が晴れた私に更に話を続けた。

「つまり私の言いたいことはね、全ては人間という呪力の可能性の形なんだ」

【非術師】、【術師】、【呪霊】。持たぬ者、持つ者、それから呪いそのもの。可能性だと表現するあの人の言葉は酷くしつくりと来た。形はどうあってもそれは人間が作り出すものだった。

「だがまだまだ、こんなものではないハズだ。人間の可能性は」

そうポツリと呟くあの人の声だけが耳に残った。

——いつもの川の土手で、私はキャンパスの前に立っていた

やることはいつもと変わらない。使いなれた筆を持ち私は絵を描き始めた。今日は呪霊を描かずに私は風景画を描く。興味のあるものは変わらず呪霊なのだが、風景を描くことは変わらずに続けていた。というのも風景画も描かねば絵の質は落ちてしまうような気がしていたからだ。生き物だけが上達していて、その他の造形物や風景が拙ければそれはやはり浮いてしまう。常に並行して上達させなければならぬと思うからこそ続けていた。

——絵は常に勉強であり反復作業だ

一日でも描かなければ感覚を失うような気がするし、私自身そう常に思うから一日とも絵を怠ったことはなかった。何より、私は私の世界に欠陥があるのを酷く恐れていた。

——私の絵の中の世界は全て息をしていなければならない

その中で生きている生き物も、私の中で生き続けなければならない。そして私もそこで生きていくのだ。……そうでなければ、私は此処で生きてはいないのだ。

——それが私の本音で、自分自身の弱さそのものだった

顔色を窺って反応を見なければならぬ社会、人の悪意も善意も見える私の現実。そこは私にとって酷く生きづらかった。せめて絵の中では息をしたい、私の切実な願いだ。いつも追われるように描くのはそういう意味があるのだが、やはり私は絵を描くことが好きなのだ。現実逃避の延長で始めたものだったが、私は世界を表現するこの行為を愛している。

——下書きの風景画に筆を走らせるだけで心が高鳴った

既に下書きを済ませたものに色を付けて少しづつ形になるまでの工程は楽しい。やり直しが出来ない直描きよりも丁寧に色を付けられるから心にゆとりが持てる。落ちてきた時、心穏やかになりたい時に私はこうして描くのだ。

——勿論時間がある時にしか出来ないのだが、幸運なことに夏休みだ

窮屈な集団生活から解放された私は羽根を伸ばしていた。すうっと口から息を吸って深呼吸をすれば自然の香りが香った。木々の間から差し込む太陽の光は私の肌を僅かに温める。木陰で肌寒さを感じながらもそれでいて心地が良い。やはり自然の恩恵が大きいのだろう。

——人間の化学は寒さと熱さを克服するに至ったが、私はどうしようもなく自然が恋しく思うことがある

寒さにも熱さにも厳しく弱者にも排他的ではあるが、それでも自然は美しいのだと思わずにはいられない。凍てつく水であつても灼熱の砂塵であつても、そこには美しい景観と造形があるだけだ。例えば石灰岩が地下水や地表水で侵食し出来上がる鍾乳洞、例えばマグマから冷えて長年の月日を経て出来上がる結晶鉱物の類。人の手が届かぬ自然には神がかつた奇跡が多いのだ。私たち人間の作り上げるよりも自然に任せた方が世界は美しいに違いなかつた。

—— 勿論、その価値は人にも分かる

そういうモノは高価で観光地になるもまた事実。見るだけで留められずに経済にするのは人の性だろう。突き詰めればそれらはモノでしかないのに。価値を付けたがるのはそうしなければ自分の今いる位置が確認出来ない人間の矮小さ故か。社会的地位と資本の大小。人間が勝手に作ったもので卑屈になつて、尊大にもなるのだ。

—— そんなことのために自然が消耗されていい筈がなかつた

世の中で過剰になるエコロジストたちの思いが少しだけ分かるような気がした。私だつて私の描く絵がそんなことに巻き込まれたのなら必死にもなるだろう。……次第に絵に集中出来なくなつてきた。少し休もう、そう決めた私は一度筆を置く。持つてきた携帯椅子にもたれ掛かれれば僅かに蓄積した疲れを癒した。私は水筒の麦茶をカップに注いで飲み干す。冷たいものが喉に駆け抜けて胃の中を冷やした。すうつと悪い

モノを考えてきた思考を冷静に戻す。からん、と溶けた氷がぶつかる音が水筒の中で響いた。

——ああ、いい天気だ

帽子のつばを上げて、顔を上げた私は改めてそう思う。ギラギラと照り付ける太陽と群青色の空、まるで切り取ったように浮かび上がった入道雲が此方を見おろす。いつそ懐かしいと思える程の趣ある風景に、私は想いを馳せた。こんないい天気なのだからもつと描かねばならない、意欲を再び見出した私が再び筆を持ち始めるとあの人が出て来た。

「やあ、元氣かい？」

あの人いつもの軽口で始める挨拶に私は頷くだけだ。少し胸をくすぐる淡い想いはきつと得難く尊いものに違いなかった。

——私の見る現実にもまた新しい価値観と世界をくれたあの人との時間、大事じゃない筈はない

私は僅かに吊り上がりそうになる口角を必死に取り繕いながら、あの人を見た。そこにはやはり胡散臭いような張り付けた笑みが浮かぶだけだ。興味と考察、観察的なその瞳はきつと私の芽生えた心の内とは違うのだろう。

——そういう目で私を見ていることに落胆するのだが、私はそれでもよかった

私はそれを含めてもこの時間が好きなのだ。何かを思わない訳ではないが、それは私の独りよがりの感傷だ。勝手に傷付いて、勝手に友愛を感じているだけ。互いに呪力について語り合うことに感情が伴う必要はなかった。

——あの人の思いはあの人だけのものだ

尊重すべきことであり、それは私もまた同様に持つ権利。芽生えたこの感情は私だけのものだ。今まで知らなかった感情の揺れに驚くのも新しい発見だ。見知らぬモノを知り、はじめて私は学ぶのだ。私の描く世界の糧になるのなら、決して悪いことではない。

——私がこの時間が好きだと言えるこの心に偽りはなかった

だが、それでも寂しいと言う心の悲鳴は日に日に増していく。狭い内側に居るような世界から私を外に連れ出してくれたのはあの人だった。まるでもう一度生まれ直したような感覚、同じものを見て共感し、対等でいられる興奮。あの方は私にとって親であり親友だった。表面上はいつも通りにした、そうでなければきっとあの方は離れてしまうような予感がしていた。

——私はこの時間がいつまでも続いて欲しいと願っていた

だが、それでも別れは来てしまう。老いがあるように、名画が朽ちていくように。永遠なんてものは保障されていないのだ。

「ごめんね、今日はお別れを言いに来たんだ」

あの人は、なんてこともない口ぶりです。いつもの態度でそんなことを言った。え、私の声は酷く遠ざかっていく。蝉の声も夏の蒸し暑さも、気付けば無くなっていた。

——この日、私は筆を持っていた

既に夏は過ぎていた。日の沈みがすっかりと早くなり、既に暗くなった外が窓から見える。秋の寒々しい空気が開いた窓から入り室内を冷やした。今は何時だろうか、ふと自室の壁に取り付けた時計を見れば深夜になっていた。昼夜は逆転してしまつたがそんなことはいつものことだ。私の日常生活ではよくあることだ、別に問題はない。

——それでも身体は正直なもので、残念ながら限界はあると告げていた

襲い掛かる眠気と震える身体、重い瞼はどうしたって脳内を鈍らせる。精神でどうこう出来るというものは肉体が健全でなければ出来ないものなのだと否が応でも理解した。

——だがそれでも、私はしなければならぬことがあつた

それは私の呪力と術式の確認。私の能力を自覚しそれを使えるようにしたかつた。私は私自身に向き合わなければならぬ。絵以外に熱心にならない私がこうも切迫しているのはやはりあの人が居るからだつた。

『此処ではやり尽くしたから』

こんなに長居をするつもりはなかったんだけどね。あの人はそう言つて私の前に消えた。またね、といつものように手を振つて立ち去つた。明日にもひよつこり現れるとどこか期待したが結局それは私の希望的観測でしかなかった。何日か足を運んだが結局は会えずにそれきりだ。初めて喪失感というモノを感じて戸惑つた。

——あの人は消息を絶つてしまつた

その事実だけが私の胸にいつまでも残り続けている。まるでしこりのように残るような違和感、思い出せば痛む胸の内。それらは気のせいだと思おうとしても誤魔化すことは決して出来なかつた。何人か昏睡状態になつたと聞くが、私も同じようになりたいと願つてしまう程に精神が病んでいた。

——結局のところ私は割り切れなかつたのだ

此処には長くは居ないからと事前に言われていた筈なのに、寂しさばかりが募つていく。どうして、何でと勝手な逆恨みをしてしまう自分がいることも理解した。いくらかつものようにしようとしても、私はいつまでも内の世界に籠れなかつた。

——……戻れなかつたと言えはいいのだろうか？

私は逃避することも出来ない程にあの人を内に入れてしまつたようだった。空想と

想像、私だけの私の世界。私と私の想像したモノ以外居ない、完璧なセカイ。血の繋がりも、他人も必要ないと思つていたのに、あの人は容易くそれを踏み込んだ。許せないことなのに、どうしたつてあの人ならいいと思う心は偽れなかった。

——あの人含めて私の世界は既に形成し始めていた

最早それは覆せないし戻れない。だったら、それに流されてしまおうと決めた。あの人を忘れたら私が私でいられなくなつてしまう。そうなるくらいなら、そっちの方がずっとマシだった。あの人の眼は決して私に好意は向けてくれないけれども、あの人の居ない世界など有り得ない。

——だから、少しでもあの人に近付こうと思つた

あの人は呪術師だと言つていた。厳密に言えば違うけど、とも言つていたがそんな差は私にとつて些細なことだ。一般人の私にその差異を問われても分からないのだから理解は一生出来ないのだろう。

——兎にも角にも、私は呪力を使いこなせるようにならなければならぬ

私があの人に置いて行かれた理由が呪力ならば、私は呪力を意のままに使えるようにならなければならぬ。これは決定事項だ。聞きかじつた程度の素人知識でどうにかなるのかという不安は先立つのだが、やらなければならぬかつた。

——……あの人はまたね、と言つていた

きつと使えるようになれば再会は近いのだ。そう信じて私は日々寝る間を惜しんで呪力の訓練を行った。つまり、絵を描いていたのだ。やっていることはいつもと変わらないだろうと思うのだが、これも一つの訓練なのだ。

——呪力とは人の負の感情から生み出されるモノだ

嫉妬と悔恨、恨みに憎悪。様々な負の感情で捻出されて変換される呪力だが呪術師はどんな感情であつても一定以上に出すことが求められる。この肉体に宿る呪力にも限界はあるのだ。事あるごとに感情の起伏を激しくしてしまえば、それだけ呪力は消費してしまう。泣いたり怒ったりしていたら身体の呪力はあつという間に消耗するのだ。

——呪力の捻出は最小かつ効率的にする方がいい

だからこそ、一定量で行使出来る訓練が必要になってくる。感情がどうであれ喜怒哀楽の出やすいもの、例えば映画が最も効率がいいとあの人はそう言っていた。

——だが私にはどうにもしつくり来なかった

何本か映画は見たのだがこうして捻出出来ているのかも分からず実感が無い。それだつたら絵の方が良かった。筆に乗せる私の本心、いつだつて絵は私の心を映していた。現実の理不尽も怒りも、この世で見た美しい景観の感動も喜びも全て私が培ってきた感情で表現だった。呪力においてもそれは変わることがないように、私は確実に呪力を身に付けていく。

——だが、それだけでは足りない

呪力を出すことを覚えても、私は私の術式を完全には理解してはいないのだ。次第に肥大化する貪欲さは、私を更に駆り立てた。

『君は出来ていたよ』

あの人がそう言っていたのなら私は出来るのだと確信していた。それもその筈、私は既にそれをしているのだ。クラス内で重傷者が出たあの日に。

——あの日の被害者は、クラス内の彼らと美術部の一部の人間

いまいち顔は思い出せないのだが、私の絵を台無しにしていた連中だった。私の嘖き出した怒り、つまり無意識に捻出した呪力。それが宿った絵は殺意となつて彼らを襲つた。当の絵はうんともすんとも言わない、結局私がそれだけ未熟だったのだろうが今はそれだけで十分だ。

——だったら私はその感情と感覚を思い出すだけでいい

向かい合うキャンバスは真っ白で、普段よりも小さい。そのキャンバスに私は筆を走らせた。筆に巡るオーラが絵具に移し、情景を思い起こさせる。

——最初に浮かぶ相手はあの人だ

額に浮かぶ傷、それから達観的なあの態度。何処か観測的で考察で人を見る動作。愚鈍な私を導いた優しい口調。思い起こして心が満たされて溢れていく。短くも濃厚

だった互いの対話、私の世界に入って来た初めてのの人、初めてのの友達。

——ああ、好きだ。好きだ、好きだ大好きだ

抱いた友愛の念と執着。次第に形作られる化け物の造形はやはり歪でおぞましく禍々しい。ふと、心にある言葉が響いた。

——だけど、あの人は私を置いて行つた

耳元に囁くように、ポツリと。心の片隅に佇むその言葉は私の心に大きな傷を作る。ビキビキと痛む胸、誤魔化せない涙腺の緩みは肉体から溢れ出した心だった。

——どうして、どうして、何で何で？

ガジガジと噛む親指の爪が軋む音が響く。嫌だ嫌だ、置いて行かないで、私の前から消えないで、捨てないで、連れて行つて。此処から連れ出して。弱くてごめんなさい、強くなるから。私の心の叫びを聞きながら私は無心に絵を描き続ける。

——私は家も、居場所も何もいらなかったのに

パキリ、爪が割れた音がする。欠けた爪は歪に形を変えて、私の肌を傷つけた。恨み、執着、罪悪に愛。あの人を呪つて描いた絵は、小さな羽根の生えた化け物だった。飛び出た目玉に額に小さく浮かぶ傷。それは小さな雛鳥だった。生まれたばかりで卵の殻を踏む鳥は、頭上を見上げている。曇天に差し込む光目掛けて飛び立とうとしていた。

——探求して新たな道を目指すあの人は、まるで雛鳥のようだ

人の呪力の先、その果ての可能性を試行錯誤するあの人の印象、いつも思っていたことを描けば酷く納得してしまった。脳内で騒ぐ心はいつの間にか成りを潜めて、私の脳を冷静にさせている。落ち着いて暫く考えていると絵に変化が訪れた。平面だった絵が次第に盛り上がり、私の目の前でそれが生まれ落ちてきた。ずるり、と落ちてきたその子を私は抱き締めて口付けた。

——私が術式を行使してから数日経った

改めて私の術式について考える。描いた生き物が飛び出るようなモノらしいが、それはどうにもいつまでも続くと言うモノではないようだ。その証拠に既に私が生んだモノは消えてしまい絵の中で静かに佇んでしまった。

——思うに、呪力を込めた分だけ私の絵の中から出るのだろうか

そう推測しているが概ね間違いはないようだ。雛鳥は最早私のことなど眼中にないようで、頭上の曇天ばかり熱心に見ていた。余りにつれなくて恨めしい。私は少しこの子を睨んでしまう。温もりが恋しくなってしまったが故の寂しさからだった。

——それと同時に身勝手な自身の考えを恥じる

幼少の児童ではあるまいに、人肌が恋しいのか？甚だおこがましい。あの子はずっと私の傍に居てくれたというのに。恩知らずにも程がある。恥と罪悪に塗り潰されながら、私はあの子を見た。やはり頭上を見上げているが、何処か心許ないような印象を感じる。まだ限界など知らぬ腕を必死に奮い立たせていた。健気で愛らしいこの子に、申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

——まだ生まれたばかりなのに

……随分と酷いことをしてしまった。ごめんね、と少し絵を撫でればやはり温もりがそこにあるような気がする。思わず抱き締めたが残念ながら温もりは腕の中で蘇ることとはなかった。

——感じ取れると言えば無機質な冷たさと硬い感触のみ

どうしたって羽毛のないあの肌を感じ取ることは出来ないのだ。ただ、それだけが残念に思う。もう一度呪力を込めればあの子は出て来てくれるのかもしれないが、明日は月曜日だ。

——通学がある以上あの子を一人にさせてはいけない

そう感覚で理解していた。一人で勝手に出て行ってしまおうような、そんな直感めいたモノを私は感じているのだ。外に出て行けばきつとこの子所構わず襲い掛かる。これは理屈では説明できないモノなのだが、確かにそう思うのだ。私と二人で居る時はとても大人しいが、きつと一人にさせてはいけないようだった。

「手間の掛かる子だね、君は」

そう言っただけで指でつつくがやはり反応はない。一人遊びにも見える行為だが、これが私とこの子の交流だった。

あの子は私の前では大人しかった。ただ見つめ返して、私が触れればあの子は反応するしその指に頬擦りだっしてくる。あの人の喪失を埋め合わせたのは間違いない。あの子だった。

——しかしこの子を作るにあたり私が込めた心は、呪いだ

あの人を思つて紡いだ術式。考えていた思いは寂しい、悲しい、どうして、何でと子供じみたモノでしかない。それなのに此処に留まり、私が寂しいと思う心を癒している。つまりこの子は私の思いに準じているのだと推測した。攻撃的なモノと言えれば私を取り巻くものはいらないという思いだけなのだが、この思いが反映されてはいない。そちらの感情は私の中で無意識に思っているモノで優先順位は低いのだろう。私が居なければきつとこの子が暴れる、そう直感で感じ取ったものは間違いではなかったようだった。

——私の術式は、ある意味願いを叶えてくれるモノらしい

私の願望を叶える術式だといつても差し支えはないだろう。無自覚に流した術式に籠った心がクラスメイト達に害を向けたように、あの子が私の喪失感を満たしてくれたように。私の感情に即してこの子たちは動くのだ。

——成程、成程。随分と燃費の悪い術式だ

だがしかし、私はこの術式と向き合う必要がある。少なくともあの人の敵となる相手の足止めになる程度の技量を、役に立てる力を、手に入れなければならない。たとえ水だけしか出せない術式であろうとも、私はあの人の隣りに立てるように術式を磨くのだ。

——あの人は少なくとも無駄なことはいない

それは印象で短期間でしか会ってはいないのだが、これは間違いなくあるのだと思う。……あの人は私の術式に興味があったから声を掛けたのだ。こんな燃費の悪い術式でも見出されたのなら、きっと何か意味がある。

——……そう信じなければやっていけないかった

私はノートに今現在で分かる限りのことを書き連ねた。常人にはきつと痛々しく見えるノートだろうが、紙媒介で残すことで私の脳内の記憶のメモリを少しでも増やす。更にまた書いて、描いて、書いて、描いた。とにかく術式を編み続けるしかなかった。きつと呪術師専門の学校はあるだろうが、私の気質では合わないことは確かだ。

——独学とあの人の言葉を頼りに、自身の術式を見続けた

短期的であっても、確かに効果はあるようで私は以前よりも疲れなくなつた。術式で描いた絵は酷く消耗していた気がしたのだが、そういうモノは段々と減ってきたような

気がする。臍を起点に胸、肩から腕へと巡らせる呪力を淀みなくコントロールし、描くのだ。

——私の見える世界は更に更に深まって、現実へと現れる

深層心理の世から生み出されたあの子たちは私の思いに応えた。氷像を作った、夜空を飛んだ、雲の中に入った、水底に沈んで息をした。夢は現実となり、私の想像欲は掻き立てられて昇華されていく。

——だが、まだ足りない

まだまだ、こんなものではない筈だ。私の中でまだ、何かが残るモノがある。これは確信。まだ、私は己の内を真に理解してない。あの人の言う混沌の中で黒く輝くモノを、私は未だに見い出せてはいないのだ。

——未熟、故に私は進歩し続ける

人生の終焉で何かを達成できる画家がいるように、芸術とは一生の追求だ。それは呪力においても同じこと。永遠の忍耐こそが私たち人間に課せられている課題だ。まだ、私は出来ると思いつけることが出来る人間こそ伸びるのは至極当然なのだ。想像力を掻き立てられなくなれば、描けなくなればと考える思考は打ち消した方が良い。才能のせいだと言い切り諦める人間になど私はなりたくなかった。

——だから今日もまた筆を持つ、そして描く

一日たりとも欠くことのなかった日課。キャンバスを前に私の心を表現し続ける。思う心は喜び、楽しかった原初の思いだ。初めてクレヨンを持ち、白い紙に赤い一線を描いたあの日。あの色から増えていく線と色が楽しくて仕方がなかった。たつた七色の色で表現されていく感動と興奮。当時の思いは私の中で溢れて形となつていく。時に悲しみ、時に怒り、私の心で感じたモノは、確かにその絵の中に残り続ける。私は、その心を置いて行くだけでいい。摩耗されていくものはあれども、私は確かに充実したものを感じている。初めて、寂しさを埋められたような気がした。

——形作られた生き物たちは私の傍らにあり続けた

身体に纏わりつく彼らは私の子供たち。腕に巻きつく子、肩と頭の上に乗る子達。最早手では収まらず腰にまでしがみついて動きづらくなつたがそれは苦にもならない。ぞろぞろと後ろを追うこの子達の健気さが愛おしい。それを厭う薄情さを私は持ち合わせてなどいないのだ。深夜に一人徘徊を繰り返す。そんな私は客観的に見ればおかしな人間なのかもしれないが、やめるつもりは毛頭もなかった。

——今日もまた外に出る

窓を開けると、ひんやりとした外気が肌を刺す。寝静まつた夜の街、ただポツンと街灯の明かりのみが足元のアスファルトを照らすだけだった。窓から飛び降りれば、二階

に部屋を持つ私は自然と重力に従い落ちるがそれは一瞬で終わる。肩を掴まれる衝撃と共にふわりと私の身体は浮遊感に包まれた。私の両肩を掴む子が空を飛び始めていた。私の倍以上ある体躯を持つ鳥は独特の鳴き声を上げる。バサリ、と上下する翼と共に飛翔し、前へ進む。私は向かい風に当たれば思わず目を細めた。頭上を見上げれば満天の星々が私達を見おろしていて、それが酷く眩しかった。

——私が街中を歩いていた時のことだった

人通りの多い、繁華街の地下。ぞろぞろと人混みに紛れながら、私は散歩をしていた。散歩というのは子供たちとの散歩のことで、いつも戯れでしていることだった。大きめの子は目立つので深夜にしか連れ回してはいいのだが、街中で一人歩くのも寂しい時はいつもそんなことをする。

——今日も、そんなことをしていた

勿論目立たないように。人に寄生するような、小ぶりな子を傍らに連れて歩いていた。それは日課であつたし、子供たちに外の世界を見せるために始めていたことだったのだが。自然と呪力を流すことが淀みなく出来るような気がする。絵画に流す呪力は滑らかに、飛び出す質量は確実に高まっていくのを日に日に自覚する。

——だつたら、このまま続けてもいいのだろう

呪力の維持、出力量の調整。きつとどちらも重要で、私も必要なトレーニングであろうと思った。トレーニングの一環でもあるのだが、少なくともこの子達にも良いことにも思えた。この子達も外の刺激に影響されているようで、楽しげにも見えるのだ。それ

が嬉しくて、自然と子供たちを連れ出す時間と日数は伸びていった。痛む足、もつれる腿。既に靴は擦り切れて足の裏にタコが出来たが、彼らを思えば嬉しい悲鳴だ。

——だって、こんなにも楽しい

私の世界に居た子が出て来てくれて、一緒に歩く。これほど楽しい現実はかつてない程だ。色のない生活だが、この時間は描く時間以上に充実していた。連れ歩く子が多くと、人混みが多ければそれほど目立つことはない。周囲に歩く人々の呪霊の群れに紛れるからだ。

——ハロウィンが過ぎて、既に11月

間もなくクリスマス、人の感情が溢れ始めて呪いが吹き溜まりとなる頃だ。冬季憂鬱、自律神経の乱れ、環境の変化、五月病。そんな人の陰気を経て、呪いとなる。あの人はそう言つて話していた時があつた。初夏が呪霊の繁忙期で、学校や病院なんて場所も嫌な記憶の受け皿となる場所は呪霊が多いのだと。確かに、呪霊は確実に増えている。見えずとも見える人間にとつてそれは酷く煩わしいのだが、それでもこの子達にとつては絶好の隠れ蓑だつた。木を隠すなら森の中だと言うが、正しくその通りの有様が眼前に広がっていた。暫く歩いて回り、街中のベンチに座る。

——少し、疲れてしまった。

眼鏡を外し、眉間を指で揉みほぐす。ほう、と息を吐き出せば少し気が楽になった。

どうやら疲れているらしい。眠気堪えて目蓋を擦れば、私の傍に居た子供の一人が転んでベンチから落ちてしまった。頭を振って右往左往する姿はとても幼く、可愛らしい。私を探しているらしいが、見当違いの方へ足を向けてしまった。向こうへ行けば私はそれを追いかける。こっちだよ、そう手を振ろうとすると目の前に誰かが立っていた。

「やあ、こんちは」

ありきたりでよくある、基本的な挨拶で男は言葉を発した。につこりと優し気に笑む。まるで張り付けたようにも感じて、何処か胡散臭く感じさせる。そう思わせるのは服装のせいなのだろうか、その男は黒衣の僧衣と袈裟を身に纏っていた。

——男はおもむろに膝をつく

その手は私の子に伸びていた。それを合図だと言わんばかりに私の子が崩れ始める。まるで形成していたモノが、そこから分解していくような光景だった。それが掃除機のように男の手に吸われて。それが黒い玉に変換されていく。

——あ、と私の声が漏れる

思わずその手が黒い玉に伸びる。だが私の動作よりも、男の方が早かった。黒い玉はあっさりと男の口の中に入って、喉が上下する。ゴクリと、喉仏が上下して凹凸する玉は胃の中に消えてしまった。この胸の中にある感傷は喪失に違いはなく、ただただ頭が

真つ白になった。

——私の中に居たあの子が消えてしまった

これは感覚的なモノなのだが、嫌でも分かる。間抜けに手が伸ばしたまま、呆然とした時間ばかりが過ぎた。どうしたんだい、そう問いかけて男は心配した様子で私を窺っていた。

「あー！見つけた夏油様ア!!」「目の前に居る子は、誰？」

明るい髪と、黒髪の少女たちが男の傍に走る。男の名は夏油というらしい。だが、そんなことはどうでもいい。私は夏油という男の肩を掴む。高身長とも言える男の肩は高く、私の腕に多少の重力が掛かるが、私はそれでも言わなければならなかった。

「……お願いします。……どうか、私の子を返して下さい」

切実に、率直に。私は言葉を選んで頭を下げる。からからと枯れる喉から絞る言葉は震えて酷く無様だ。双子の片割れらしい少女はウケると言って笑っていた。

「奈々子、失礼」

そう片割れに諫められるも少女は、私の隣りに立ちスマートフォンで写真を撮っている。私は必死で、乞うしかない。私の世界にある子をもう一度生み出す。そんなことは出来なかつたし、私には考えられなかつたのだ。兎にも角にも私に出来ることは媚びへつらうことしか出来なかつた。

「ううん、そうだね……」

友達だったのかな？夏油は暫く考え込んだ素振りで、腕を組む。

「ごめんね、だけど私には戻すことが難しいんだ」

ごめんね、とまた一つ言葉を発して夏油は返すだけだった。そんなことよりも、肩を掴んでいた私の手を掴み、握る。少し話さないか、夏油は笑う。

「私はね、大いなる力は大いなる目的のために使うべきだと考える」

これは大儀だ、大げさに手を伸ばした夏油が語る。まるで新興宗教団体のそれだった。私の今の心境では酷く煩いものであるのに、夏油は更に続けた。

「だから、君にも手伝って欲しいわけ」

何を、訳が分からない。思わず問えば、夏油は周囲を見渡した。周囲に居る人間、つまり非術師を、汚物でも見るように。少なくとも私を見る時にはその眼にそんな感情は見受けられなかった。だが今は確かにそんな変化が見える。言いたいことを理解するが、夏油は続けた。

「非術師を殺して、呪術師だけの世界を作るんだ」

冷たく重たい言葉が、ズシリと私の胃の臓腑に押し掛かってきた。

——夏油傑、男はそう名乗った

夏油に促され双子も渋々と言った様子で名乗った。黒髪の少女は美々子、明るい髪の少女は奈々子といったか。どちらも夏油を中心に両隣に座り陣取っている。しなだれかかる姿はさながら援助交際のようなのだ、犯罪的にも思える。夏油はやりわりと慎みを持ってと諭していた。夏油は子持ちの親のような表情を浮かばせている。どうやらそちらの苦勞があるのだろうと察するには容易かった。

——……どちらかと言えば、双子の方が心酔しているといったところだろうか

何にせよ、言葉は選ばなければならぬ。ファミレスで対面する私と彼ら、状況と言えど不利なのは間違いない。夏油に言葉を選べば双子は刺激することはないだろう、そう考えて私はメニュー表からランチを一つ頼む。双子はパンケーキ、夏油は何も頼まなかった。

「猿の作るモノなんて、食べる訳がないだろう？」

頼まなかった様子を察したのか、夏油はそう語る。心底毛嫌いしたように眉間に皺が

寄る。消毒液を机に吹きかけている様子から彼の潔癖さが窺えた。それで、夏油はまた先程の話を続ける。

「今の世界に疑問はないかい？」

そんな口頭で始まった。今の世界、つまり一般社会の秩序を守るために呪術師が暗躍する世界。悪く言えば、呪術師だけが消耗されるだけの世界。夏油はそれを間違っているのだと、そう語る。曰く、強者が弱者に適応してしまっている。曰く、人類も生存戦略を見直すべき。曰く曰くと、キリがない。つまり言いたいことを纏めれば、猿は私の世界に必要ないが彼の結論だった。

——非術師を皆殺しにしよう

呪術師だけの世界を作ろう、先程言った言葉を夏油は繰り返す。まるで謡うように称えるように、そんなことを語る。周囲で、ランチを食べている人たちの殆どが非術師だ。他愛もない話で笑い合う人たち、注文を窺う店員、レジでやり取りをする人達。そんな日常の営みを繰り返す人を全て殺すのだ。

——つまり私達以外に立つ人は居なくなる

周囲で血まみれになって倒れる人達のビジョンが浮かぶ。幻覚であってもその中で、夏油は笑うだけ。双子たちもパンケーキを食べているだけだった。食べているモノが喉から出かかると、敢えて呑み込んで息を吐く。正気ではないなど、思えるだけ私もま

だまだ正常らしい。水を飲んで頭を冷やす。

——そういえば、あの人とそんなことを話したな

ふと、そんなことを思い出す。あの人との会話、授業とも思える話し合い。呪霊を無くす方法の中で私は夏油と同じ結論を述べたことがあった。呪術師だけを残すのは得策ではなく、現状維持が望ましいとも言った気がするが、そんなこと今は思い出さなくてもいい。つまり、夏油という男は私が仮定で述べたことを実行することにしたのだから。

——成程、通りで壊れている訳だ

喜怒哀楽、どんな感情でも疲れるのは当たり前で。怒れば疲れるし殺意なんて激情以上の疲労だ。感情すらも摩耗する。だから、非術師をヒトとは見ていない。夏油が彼らを猿と呼称するのはそういった理由なのだろう。人を人とカウントしなくなつたことの表れで、最早それは単位だ。家畜の豚や牛を肉にするようなモノで、夏油は非術師をそう見ていた。

——それでも尚、夏油にはすべきことがあるのだろう

私と目の前の双子に対しての対話の彼が正常の彼であるのなら、生来の夏油という男はとて優しい男だと思う。物腰柔らかで、それこそ論してまで気遣いが出来るような。そんな男がどうしてこうなるのか、そんなことを考えてもこれ以上の推測は出来な

い。今までの会話ではそれ以上の観察は出来ないし、引き出してもそれは憶測の域だ。夏油とはそういう生き物だと理解する。それで、と返事を待つ夏油に私が頷く筈がなかった。

——理解はしたが、協力は出来ない

結論は既に決まっていた。私はそもそも戦闘向けではないし、まだまだ未熟。何より、私の子供を奪った相手に協力出来るだけの許容がないのだ。醜い私情であっても、私の世界に土足で踏み込む輩はどうしたってそんな感情を持つてしまう。最早性分で私のどうしようもない部分だ。お前、打って変わって怒る双子を止めるのは夏油だった。分かっていたよ、そう言つて苦笑する。

「私が最初にしてしまったことで第一印象を損なわせてしまつていたしね」

駄目元だったから、どうしようもないね。そう返して夏油は言葉を続けた。

「君の術式で呪霊を集められたら、なんて考えていたけどね」

……それこそ、とんでもないことだった。暫く絶句し、思わず睨めば夏油はすまないとまた返した。

「だけどね、君が孤独ではないのかなって思ったのも事実だよ」

私がそうだったからね、夏油はぼんやりと語る。寂しげで何処か遠くを見るようにそんなことを話す。……そうした経験があるからだろう。孤独ではなかったのか？ そう

問われれば否定は出来ないのだが。それに同調しかけるがやめる。それ以上の話は傷の舐め合いになりそうだから、私も言葉を閉ざした。掛ける言葉も互いに出し尽くしてしまつた以上、最早此処に留まる理由は互いになかつた。

「今回は振られちゃつたいたいだから、また誘つてみるよ」

いつでも待つているよ、そう言葉を残して会計を済ませていく。置いて行かれた私の傍には名刺が置かれていた。夏油傑の連絡先だろうか、調べて見れば宗教団体のそれだつた。

——やはり怪しい勧誘だつたか？

そう思えばそうでもなく。夏油は無理強いすることはなかつた。1つの選択肢として選ぶべきなのだろう、そう考へて名刺を財布に入れた。夏油自身は悪い人ではないけれども、少なくとも私には合わなかつたのだろう。第一印象自体がそもそも悪かつたから縁もなかつたに違ひなかつた。帰つてこない子供を思えば悲しくなつて絵を描こうと決めた。

——まず初めに、当時私の外に出る方法は酷く面倒なものだった

兎にも角にもやることが多い。まず寝たと思わせて、寝室に寝静まる頃まで籠ることから物事を始める。次に家族に出ることを悟られてはならない。音を立てずに、ドアを開けて閉め、鍵を掛けるまで。一つ一つの動作に繊細さを求める。ドアの開閉に軋む床、零れる吐息と歩く音。ありふれた生活音ではあれども、深夜の寝静まった環境下ではそんな音ですらも容易く響く。だからこそ慎重に事を運ばなければならぬ。この時ばかりは親の庇護下にあることが億劫で、それでいて申し訳がないなどと二律背反の思いを抱えるのだが。それでも早く大人になりたいという思いを抱えずにはいられなかった。

——自由な時に自らの意思で出る魅力は未成年には抗えない

私もまた同様だ。外に出たい理由はもつと別にあるが、私もまた自分の好きな時間が欲しいと願うことに変わりはない。その為に家を出る計画は念入りにするのもまた道理だが、仮に簡単に出たとしても常に同様の緊張とリスクは付きまとう。

——何せ所詮私は学生風情だ

深夜徘徊などもつての外で警察やら他人の視線は気にしなければならぬ。人に見られぬように、悟られぬように。フードを深々と被りスケッチブックと絵筆を持ち歩く。傍から見ればそれは不審者に違ひはない。実際に声を掛けられたことは何度もあり、その度に逃げ回った。

——何処かで見知らぬ誰かに見られているのではないのか？

周囲に噂になっているのではないのか、そんな焦燥と疑心ばかりが募る。私の中で考えが纏まらなくなっていた。

——ああ、全くままならない

次第に物事に集中出来ないことに苛立ちを覚えて、その感情を呪いにして吐き捨てた。自由への執着、外への渴望。扶養の身の分際で身の程を弁えない願いは絵になった。私の心の捌け口となった思いの形。その絵の中で鳥は自由に空を飛んでいた。ピルの屋上から飛び立つその鳥は、羽ばたき青空の遙か遠くを目指す。鳥の目指す先、黒く立ち込める雷雲に光る稲妻。不穏な行く先であっても、決して不安にも思わせない力強い羽ばたきで羽根を一つ落とす。呪いの形は私を飛び出して新しい子供になった。

——その日から私はこの子と空を飛んだ

外気が冷たく、頭上に浮かぶ月と星が手に届く程に近い。外を出ることがこんなにも

楽しい。そう思えるようになったのはこの子のおかげだった。

——大きく羽ばたかせる姿を、私は誇らしく思う

同時に、こんな思いで生み出したことを恥じた。吹き込んだ願いは自由。あまりにも身勝手でおこがましい。利用する形で生み出したことに対しての後悔が勝っていた。

——これでは、ただの道具ではないか？

私の中にある世界では生き生きしているのに、私はこの子にこの子自身の意思を感じない。これでは呪霊の方がよっぽど上出来だ、……これでは、目的を果たす為に作っただけだ。

——この子は凄いい、この子は、いやこの子達はもつと素晴らしいのに!!

いつも描く度に出来た子に嘆く言葉は心の中で反響し続ける。……私自身の絵の荒さと拙さを感じた。……もつと私はこの子を立派に出来た筈だ、それこそ生き物のように。生物の本能に従う程のリアルを感じなかった。

——吹き込む思いは、呪力はそんなモノなのか？

もつと願いを込めて、筆に乗せなければならぬ。描き足すなどという行動が出来ないのは私の中で完結しきったモノがあるからだろう。……いや、違う。きつと私はこの子に余計なモノを付け加えたくないのだ。自分が未熟なことを理解している、だからこそこんな未熟な力量でこの子を穢したくはなかった。それは侮辱だ、書き足すなんて愚

行は出来なかった。

——まだ、その時ではない

だから、私が出来ると思うまで、きつとこの子たちはこのままだ。だけど、絶対に描くと誓い、勝手にこの子たちに約束をした。

——私はこの日も外に出ていた

時計の針は既に深夜を示す。いつもの快晴、いつもの散歩。きつとあの人を追いかける日が来るまで、卒業するまで、ずっとこのままだと思っていた。今だって、これからだって。きつと日常は変わらない。保証もない癖に、私はそう信じてしまっていた。だが、あの人が消えた日があるように、日常なんてすぐに終わるのだ。

——だから、今日この日だけは違っていた

見られぬように人目を避けていた。出来るだけ住宅街の外を探す。ふと見下ろせば、森の奥ではアスファルトの廃墟が見える。今日はこの辺りがいいかもしれない、そう判断すれば私の意図を組んでくれたらしい。鳥は緩やかに降下して、翼をゆつくりと動かせた。降り立てば翼を休めた子に労いを込めて、くちばしを撫でる。ギャア、と答える

ように鳴き声を上げて静かに距離を取り、羽根を休めた子を見届けた。

——私は改めて、周囲の様子を窺う

、廃墟の屋上、そこから私は真下の光景を眺めた。ガシャリ、とフェンスを掴めば赤く錆びた硬い感触が伝わる。

——上空から見ていた時よりも実物はずっと朽ちていた

ひび割れたアスファルト、無造作に生える雑草の群生。崩れた壁からは錆びた鉄筋が剥き出して、向こうの棟では崩壊し崩れた部屋が見える。……人の手から離れた環境下ではいかに文化が無力なものなのかを教え込まれるのだ。畏怖と敬意、言葉に出来ぬ感情が溢れて止められない。

——だがそれでも尚、そこには美がある

完全ではない、不完全さの歪さ。生の終わり、破滅の美。挙げていけばキリがないのだ。盛者必衰、諸行無常。？栄と没落、若さと衰え。そこには永遠など確約などさされてはいない。ただただ、非情リアルが伝わって、堪らなくなる程の懐かしさや儚さを感じさせていく。

——かつて、そこに居た人達の軌跡があるからだろうか？

繁栄と没落、若さと衰え。栄枯盛衰の有様は、説明の出来ない程の圧巻さで訴えかける。嫌が応にも描き手の創作意欲を掻き立てた。勿論、廃墟だけではなく、森の奥でも、

海の底でも私は何度もそれを感じて描かずにはいられない。

——お前にこれを表現できるのか？

そう、彼らは私に煽るのだ。私はその圧倒的な光景に、嫉妬すら覚える。挑発的で、生意気だ。……筆を、持たなければならぬ。目的は子供たちの気晴らしでもあるのだが、私はその感情を喰らって繋げる。次の絵を描くための糖にする為だ。次は、その次こそは、そう何度も繰り返して、絵に呪いを込めていくのだ。

——私の日常は常にこうだった

だが、次の瞬間にそれは容易く崩れ去ったのだ。私はその瞬間になっても、呑気なモノだった。いつものように筆を走らせていた時だ、何処かで足音が聞こえた。最初は気のせいだと思っていたが、無視が出来なくなる程の気配を感じた。ヒタリヒタリ、と何かが這いよるように近づいている。私の子供がやけに騒がしい。それと同時に、不快な気配は深まった。

——何かが、いる

そう察して身構える。苔むして湿気る壁の向こうで何かが揺らめいた。ひと時の、静寂が訪れる。風の音だけが反響し、音が止んだ。

——次の瞬間、轟音が響く

鼓膜がビリビリと響き、思わず耳を塞いだ。視界に捉えていた壁は四散し、その原因

となつたモノが現れた。ズル、ズル……。生々しく濡れた音が這いずる。

『オオ……亜、ああ、阿ああああ、亜、あ、ああッ!!』

それは毛むくじやらの獣だった。その毛で覆われた口は大きく開き、叫ぶがその口は獣のそれではない。人の、霊長類の類。そんな歯が剥き出しになってカチカチと、何度も口を動かす動作を見せていた。四つん這いの足は数えきれず、手とも足とも言えぬ形状のものが無数に胴体から生える。指先は無造作に動き爪を立ててアスファルトを削った。

——見るもおどましく、名状しがたき生き物がそこにいる

呪霊、私の知る存在の文字が浮かぶ。夏が過ぎ、既に心霊スポットを巡るシーズンは過ぎていたからこそ油断した。この場に居るこれは呪術師から生き残ってみせている。それがいかに強かで残虐かは、把握するには容易くて。それが冷静に理解する自分が嫌になった。

——だが、今はそんなことを考えてはならないと悟る

……:そこどころではなかった。危険、危険、危険!!何度も私の脳内で繰り返される。背筋から冷たい汗が伝うのに、こんなにも心臓が鳴っていた。それが煩くて、ただただ熱くて震える。私を奮い立たせるのは生存本能だった。暫く睨み合い、出方を窺う。

——逃げるには、あの子に乗ればよい

走れば背を向けることになる。その間のコンマ数秒、……どれ程の影響が及ぶかを考える。……あの呪霊は恐らく待つことはない、足場を壊して私の逃げを阻むだろう。では迎え撃つか？……いや、それは最適ではない。……私に、戦う術はないのだ。ストックはないから此処で生み出すしかないのだが、筆で何かを描いている間に死ぬだろう。一瞬で思考し想定するもそれらの全ての結末は、私の死で終わる。

——嫌な、最期だ

勝手に出て行つて死ぬのだから自業自得ともいうのだが。……詰みだ、私はこれで終わりなのか？……気持ち悪いな、吐き気がする。胸焼けすらも感じているのに、私は自身の生を諦められない。

——死にたくない……、まだ死ねない。

私は、まだあの人に会えていないのに。私はまだ、自身の底を見ていないのに。まだ未練が残っているのに、こんな場所で死ぬのか？沸々とした感情の昂ぶりは、本能で叫ぶ。ぎやあ、と濁音の混じるあの子の声が響いた。あの子の翼が動き、その軌道の先にはあの呪霊が居る。

「やめろ!!」

やめてくれ、そう叫んでいる。あの子に込めた思いは自由への願いである筈なのに、何故こんな形で逃がそうとするのか。……いや違う、私の強い生への願いがそうさせて

いるのだ。自由の妨げになるのだと捉えてしまった。無謀にも迎え撃ち、そのくちばしで呪霊の目を突き刺す。苦悶に満ちる獣の咆哮、鬪争しようとするあの子の鳴き声が響いた。だが、そんな交戦も容易く終わる。痛みに慣れた呪霊が動き、潰れなかった方の目玉があの子を捉えた。その無数にある腕があの子を掴み、羽根を巻る。ブチブチと筋肉繊維が引き千切れ、真つ赤に染まる羽根が血だまりに一つ一つ落ちていった。

——私は、ただ声を上げるだけだった

私の喉が引き裂くように痛む。鼓膜が痛い。紛れもなく、絶叫だった。私自身が知らぬ大きな声量は私の身体を震わせて、涙がポロポロと溢れて止められない。あの子の凄惨な姿が滲んでいくのが堪らなく辛くて悔しかった。それすらも見届けられぬ精神の弱さすらも恨めしい。

——なんて無力なことだろうか

なんて脆弱、なんて浅はか。……なんと、無様な有様か。これではただの癩癩を起こす子供だ。

——……私はまだ戦う術すら知らなかった

今更そんなことに気付いて、濡れた口角が吊り上がって自嘲の笑みが浮かぶ。思わず出た笑いが、喉からひり出した。それすらも苛立ち、腸が煮えくり返る。私は急に自身に恥ずかしくなった。……勝手に、自惚れていたのだ。周りと違うモノが見えるのはあ

る意味才能だ、そして術式があるのもまた才能だ。だが、自衛の術はないのは論外だった。

——術式を知った、呪力を知ったから何だというのか？

そこからが、スタートだったのだ。その業界で生きるのならば、生き残ることと死ぬことをいつも考えなければならぬ。生死の境界線など薄いに決まっているのだ。私は呪力と術式ばかりを磨いてばかりで、絵を描いてばかりで。そんなことすらも死ぬかもしれない瀬戸際で気付いていたのだから大馬鹿者だった。だからこうして私の子が非情な状況に置かれているのだから目も当てられない。

——だが、それでも好機が出来た

呪霊はあの子に随分と熱心らしい、今も丁寧な羽根を筆っていた。楽しい、愉しいと不快な声を上げて笑ったあいつを殺したくて仕方がない。冷静に、状況を分析する。……打破するにはあの子を犠牲にして描けばいい。あの子の仇に対しての明確な殺意を、怒りを呪いにして捻出して、描き上げてしまえ。そう思っている、あの子を犠牲にすることに踏ん切りがつけられる訳がなかった。一瞬の躊躇いの葛藤が生じる。

——あの子と何度飛んだと思っている？

あの子との思い出は微々たるものではあるが、それでも私はあの子を生み出した情がある。それは今まで描いてきた子供たちに対して抱く想いだった。私はこの子達を、須

子もこうなっていたから、きっと私の子は死んでしまったり居なくなってしまうところなるのだろうとも客観的に理解する。後に残ったのは嫌悪感と殺した後の虚無だけだった。夜明けが見えるが最早帰る気にもなれなくて、ただ血だまりに座り込んだ。

——私が、こうして座り込んでどれ程だろうか？

腕時計なんていう大層なモノはないのだが、とうに夜は更けた。太陽は既に頭上を登り既に私を追い越している。ずっと膝をついていたせいで、アスファルトの硬さで膝が痛む。恐らく帰っても怒られるだけだ。そう考えると帰りたくない気持ちの方が強くなってくるのだが肉体は限界らしい。飢えを訴えて腹を鳴らす。小さく響く音を聞けば、一気に虚脱感に襲われて。それがまたどうにも情けない。

——それでも、失われた喪失感は胸の空虚さを誘う

目の前で見える視界は灰色がかったように色彩を感じず、肌を感じる冷たさも分からない。まるで伽藍洞な人形のようなのだ。

——後悔し、悲しみに暮れた後のヒトの心はこうなってしまうのだろうか

そんなことを他人事のように思う。……一度ならず、二度までも、私は子供を二人失ってしまった。どちらも不慮の事故ではないのに、私自身の甘さ故に。

——その事實は、私の戒めになるのだろうか

失ったモノは戻らないし、治せない。時間は巻き戻らぬのもまた事實、それが摂理。

私に出来ることは受け止めることしかないのだ。次に続かぬように、学ぶのみ。……そうすることしか出来ないのである。グルグルと、黒い淀みが腹の内循環した。

——家に帰ればやはり家族に怒られた

何処に行っていたの、母の言葉に始まり父親の拳。罵声に涙、その他諸々。迷惑も考えられないんだ？年の近い妹は相変わらず、私に厳しい言葉を吐き捨てるだけだった。その後色々言われた気がするが、大半の言葉は聞き流してしまつたから覚えてはいない。服装も砂だらけだったから余計に言われたが、そんな言葉は最早響くことはなかった。

「腕は動くの？」

そうして、いつもの言葉を私に吐き出した。心配だと、そう言つて。……私の心配などとのたまう口はどんな心境なのだろうか、とも思うが性格上厚かましいのだから今更だ。

——心配なのは私の腕だけだろうに

内心で吐き捨てた言葉が胸の中で黒く淀む。次第に蓄積したどす黒い何かで胸焼けがする、気持ちが悪い。それを吐き出す術は、未だない。また音が雑音になつて塗りつぶされる。ギャアギャアと騒ぐそれらが自分と同じ人間であるのかも疑わしい。

——……どうやら疲れているようだ

適当にそれらに返答して、私は部屋に籠る準備を始める。鳴き声はまた一層激しくなったが扉を閉ざす。そのまま背を向けた。

——どうして出来ないの？

皆出来ていることなのに、そう言つて母が私の肩を掴む。ゆさゆさと揺られるまま、頭が動く。脳が揺らされて気持ちが悪いのに、そんなことなど言える立場ではないことも知つていた。だから黙つて受け入れる、受け流す。流れる水のように、そのまま風に流れる草木のように。

——いつそ私がそんなモノになれたら良いのに

いつもそう思つていた。そうすれば何も言われぬし何も考えずに済む。花は良いな、川は良いな。ただ見られて鑑賞されて褒められる。私は褒められたことはないから余計に羨ましい。同時にそうした自然の景観に癒される。生命力の躍動と、力強さをつまでも見ていた。そうして頑張つて笛を吹く。リコーダーとかいう縦笛を必死に指を動かして、息を吹けば息苦しくなつた。何度も繰り返してようやく出来るようになって母に聞かせる。

——それで？

他の子をもつと凄いのをやっていたよ？もつと上手くならないと。そう言つて母は私に新しいことを押し付けた。また新しいことに追い立てられて責められる。必死に追いかけるのに、私だけがいつも遅いのだ。

——……いつも私はそうだった

勉強も運動も、平均以下、愚鈍でノロマ。頑張つて追い付いても、既にその先で誰かが立つ。周囲も私と同じくらい頑張つてやっているのかと思えば、成長すればそうでもないことにも気付く。適当に聞き流しても出来る生徒、不真面目でも平均的な生徒が妬ましい。劣等感を抱くには充分で、卑屈にもなった。妹は後者の部類で、そつなくこなして私を笑う。

——馬鹿みたい

……私もそう思う。妹のように、私もそつなく出来ればこうはならなかった。そうして出来れば両親は私に無関心にはならなかっただろうし、妹とだつて上手く関係を続けていられただろう。だけど、そうはならなかった。つまりとところ、私は私のままだった。腫れ物扱いの現状で打破するには至れない。周囲の人間が私をなんて言っているのか、知らない訳ではなかった。

——私は現実を見たくはないまま、初めて絵を描いた

クレヨンを持って絵を描いてみる。家にはそれしかなかったからそれで描いた。パステルカラー独特の色彩が紙に乗り、赤い線が走る。それが何故か楽しくて、私はそれをいつまでも描き続けた。

——最初に描いた絵はいつか見た公園の木だった

当時の私は小さくてその木が世界の中心にも思っていたから描いたが中々いい出来だ。次に描いたモノは橋の下にある川、窓から見える街並み。拙かったそれらが次第に鮮明になっていく。描き上がった絵が私の周囲を取り囲み、その中心に私がいる。

——そこには誰も居ないし、音もない

私だけの世界は、なんて素晴らしいのだろう。クレヨンは既に指では持てないのに私はそれも気にせず紙に描いた。そんな光景を両親は見て、初めて褒めた。

——凄じやないか

端の紙を拾い上げて私の頭を撫でる。……嬉しかった。だから一層頑張つて描いた。詰み上がるスケッチブックの量だけ、私の画力は上がる。表現技法はその都度覚えて、どうしたら構図が出来るのかを考える知識と技術を身に付けた。勿論、そこには話せることを増やしたい思いや恥もあったのだが。それでも、確かに楽しくて、時間は過ぎていく。

——気付けば私は表彰されていた

両親が勝手に応募したのだろうか、周囲の拍手で耳が痛い。表彰状も、優勝カップも重たくて邪魔だった。その時の感情は上手く表現が出来ない、私は筆と紙だけが欲しいのに。

——私は家の個室に連れ出されていた

空き家で物置として使われていた部屋だった。既に物はなく、キャンパスと椅子だけが置かれていた。応援しているぞ、そう両親に言われて筆と絵具だけを渡される。環境をくれた筈なのに、想ってくれたのに。……何故こうも虚しいのか、重く感じるのか。分からないが、ただ両親の笑みが気持ち悪い。最早顔が分からなくなつた。妹が叫ぶ、なんでこいつだけ。そう言つて私の肩を叩くが両親に諫められた。

——怪我をさせたら危ない

謝りなさい、そう言つて妹を叱る。学校に行けばやはり、褒められる。担任も肩を叩いて褒めてきた。普段話さない同級生も声を掛けてくる。……シンデレラストーリーなんてモノがあるが、こんな光景であるのなら私は遠慮したくなつた。

——大嫌い!!

何であんただけ、家に帰れば妹が罵倒する。その眼には妬みがあつて、私はそれを受け止めるしかなかった。妹との関係が修正できなくなつていく。私の中で、他人への関

心が消えていった。

——私には、絵しかない

絵を描こう、そう思ってたただ筆を持つ。私の中にある世界は、感じたモノは確かにそこにある。絵だけは私を裏切らない、絵だけが私の……。ブツリ、と目の前が真っ暗になった。

目を覚ませば既に夜。私の額に汗が滲んでいた。張り付いた前髪を掻き分けて、キャンパスの前に立つ。

——描かなければ、とただそれだけを思う

筆は真っ赤で、私はその腕を動かした。鮮明に浮かぶ血だまりはいつまでも私の記憶に残っている。何故かそれを描こうと思っていた。……そういえば攻撃する手段を持たないといけなかったと考え、呪力を込めた。

——込めた想いはかつての記憶への思い

夢で見た記憶は鮮明で、今しか描けないと思った。同級生に対して、担任に対して感じた想いもそのままに描く。送る思いは両親へ、妹へと。全ての人に対しても忘れず

に。閉じ込めて、腹の内に耐えていたモノだった。それが嘔き出して、呪力が籠る。明確な殺意は形となつて、絵の中は血だまりに濡れた。ガチャリ、ノックもなく開いた扉に目を向ければ家族の誰かが私に声を掛けるが、そんな声も分からない。

——飛び出した子供が、それを喰らつた

撒き散る血と、臓物。崩れた顔面でようやく私は誰かを理解する。ああ、妹か。そんな顔の形をしていたな、他人事のようにそう捉えて子供と一緒に下の階へと下りていった。